特別企画　日本薬業政治連盟　熊倉貞武名誉会長に聞く

全国各地の支部での きめ細かな対応が卸の強み

インタビュアー／飯塚敏高（広報・研修委員会委員長）

薬政連会長を17年間務め、この度、勇退して名誉会長に就任された熊倉前会長に、これまでの活動と今後の方向性について伺った。

熊倉前会長は、会長就任の経緯や政治家との関係づくりについて振り返った上で、今回就任した鹿目新会長が最適任者であることを強調した。そして、全国に支部を持ってきめ細かな対応ができる卸の強みを生かし、卸連合会とともに更なる活動を展開する必要性を語った。

■日時：平成26年4月7日（月）14：00～15：00　■場所：㈱メディパルホールディングス本社

突然だった会長就任

――まずは17年間の会長在任期間を振り返って、お感じになっていることをお聞かせください。

私が会長に就任したのは、17年前だから53歳のときです。当時、自民党には、国会議員を集めた医薬品問題研究会がありました。トップは橋本龍太郎先生で、座長は戸井田三郎先生でしたが選挙中に亡くなられ、その後の座長は丹羽雄哉先生が務められました。橋本先生、丹羽先生とも慶應義塾大学出身でした。

当時の薬政連会長は卸連合会の兒島会長が兼任されていましたが、兒島会長は丹羽先生とあまりコネクションがありませんでした。私は慶應出身で丹羽先生の同期でしたから、それなら薬政連会長をやりなさい、とかなり強引に、しかも兒島会長の任期途中でありながら務めることになったのです。そのため、私の任期は17年という半端な奇数年になっているわけです。そのような経緯で会

長を務めることになりました。

――突然の就任だったわけですか。

準備が整っていたわけではなかったので、見よう見まねで始めました。当時の事務局長は宮崎出身の後藤さんでした。そのとき、同じ宮崎出身の参議院議員の長峯基先生がおり、長峯先生と武見敬三先生、鳥取の常田享詳先生などの参議院議員１年生で厚生関係の会をつくったのです。長峯先生は山之内製薬出身で、私の２年先輩でした。そんな政治家のネットワークもありましたが、人間関係を把握するのに結構時間はかかりました。

――就任当初の目標や基本方針は。

卸連合会の主張を実現させるというのが薬政連の使命です。しかし、卸連合会の課題を政治的に解決するために頑張ってくれる先生など、そんなにいらっしゃるわけではありません。反対の立場の先生もおり、卸連合会の意見を理解してもらうことが先決だと思いました。そんな先生とも新たに関係をつくっていかなければならないので、付き合う先生の幅は自然に広くなっていきました。

――その意味では、民主党政権の４年間は立ち位置が難しかったのではないですか。

直前の選挙では、みんなの前で「薬政連は自民党一本でいく」と宣言しましたから、後で叩かれました。

民主党に関しては不案内でしたので、まったく新規に関係をつくらなければならず、やはり苦労しました。実は自民党が負けた場合、私は責任を取って辞めるつもりでいたのです。ところが、その前に事務局長も交代していましたので、続けて会長も交代するわけにもいかず、引き続き任務を全うすることにしたのです。

しかし実際、民主党政権になってみると、若手で清潔感のある先生が多かったですね。霞ヶ関出身の先生も多く、よく勉強されていました。自力で勉強して議員になった先生が多かったように感じました。その意味では、民主党政権は悪くはありませんでした。

私どもは仙谷由人先生のグループを中心にアプローチしました。仙谷先生には、私どもも勉強させてもらいました。仙谷グループには梅村聡先生もおられました。非常によく勉強されており、一番のホープだったのではないでしょうか。そのようなことで、民主党との関係は比較的早く築けたと思います。

もっとも、自民党への応援姿勢は、野党時代にあっても変わらずに持っていました。そこはやはり義理と人情の世界ですから、政権に返り咲けば私どもの一貫した姿勢を高く評価していただけました。

最適者に会長を託す

――今回、鹿目会長にバトンタッチされました。

鹿目さんは薬政連会長には最適任者だと確信しています。なんといっても明るいし、声が大きい。白黒もはっきりしています。政治家と話をするには論旨をスパッと明快にする必要がありますが、その点で鹿目さんは優れており、バイタリティーもあります。

また、物理的には東京にいないと難しいところがあります。国会に近いということもありますが、議員の先生方とは、約束したとおりに会えないほうが多いからです。特に本会議が始まると、アポイントを取って会いに行っても、キャンセルされることが少なくありません。ですから、薬政連会長は東京の人でなければなかなか務まらない面があります。そうなると候補者は限られてきます。鹿目さんに話すと、やる気になってくれたので、気持ちが変わらないうちにお願いすることにしました。

――４年くらい国政選挙がないタイミングを、交代時期としてねらっておられたとか。

安倍政権がどこまで安定するかは、参院選の時点ではまだ分かりませんでしたが、参院選で大勝し、国民の支持もあるので恐らく2016年の衆参同時選挙まで選挙はないと思われます。いまが一番平和な時期です。卸連合会の課題はたくさんありますが、政権情勢では一番いい引き継ぎ時期だと思いました。鹿目さんは副会長として一緒に議員

会館なども回っていましたから、私のときのようにいきなり放り込まれたのとは違いました。

――引き続き名誉会長として残られるわけですから、新会長は心強いのではないですか。

事務局長がしっかりしているので心配はありませんが、人脈が財産ですから、いきなり新しい会長に代わってしまったのでは国会議員の先生も不安に感じるのではないかと思いました。ですから、しばらく一緒にやっていくことにしました。

政治力とは国民代表の力

――薬政連の役割、果たすべき責務として重要なことはなんでしょうか。

取り組まなければならないテーマはいろいろあります。ただ卸の場合、大抵、その交渉相手は厚生労働省です。その場合、バックに政治力があると違うのです。一企業として厚生労働省に行って話をしてもなかなか通りません。卸連合会として交渉する必要があるわけですが、そのときに政治力がものを言います。政治力とは国民代表の力であり、声になるわけですから重みが違うのです。

――薬政連のパーティに多くの政治家に出席していただけるのもすごい力になるわけですね。

そうです。それと顔ぶれが重要で、大物がどれくらい来られたかがポイントです。私どもの場合は、政治家にかなりの厚みがあります。厚生労働省からの出席者にも、そのことは十分伝わっているのではないかと思います。

卸の強みは全国にある支部

――様々な問題があり、薬政連の活動の重要性は高まっているのではないですか。

現在の政治家の中には卸を悪く言う人はほとんどいないと思うのですが、やはり普段からの関係づくりが大事なのです。

その意味では、卸は全国に拠点があるので、各地域に薬政連の支部をおくことができ、きめ細かな対応が可能です。それが卸の強みであり、メーカーにはなかなかマネができません。また、私どもには女性部もあります。選挙になると女性の力は心強いですね。この女性部は、実は安倍晋三先生の発案でした。つくったほうがいいとアドバイスしていただいたのです。それで、主要な地域で立ち上げました。ただ、女性部長を務めてもらうのが大変でした。女性の役員はほとんどいないし、社員は辞めてしまうことがあるからです。

――各地域での活動が大事なのですね。

最も有効なのは、15人から20人規模の集会です。せいぜい30人くらいで、それ以上になると人数が多すぎてコミュニケーションが取れません。そういう小集会をまめにこなす国会議員の先生は強いですよ。

私たちもそうでしょう。会社の中で、10人、20人の集まりであれば相手の目を見ながら話せますが、100人、200人になると、壇上で一方的に話すだけになってしまいます。

その意味で、大演説会は、会社から動員をかけられて行くわけですから、効果は限定的になります。それでも、卸の動員力は強いですよ。頼むときちんと出してくれます。そういう丹念な活動が薬政連を支えていると思います。

それから、卸では朝礼を行っており、これも強みです。朝礼の場を持っていれば、改めて社員を集めなくていいわけですから。

――朝礼のときに政治家の先生が話をすれば、かなりの効果が期待できる。

朝礼で集まる社員が10人だったとしても、そこ

から家族などに伝わっていきます。駅頭に立ってマイクを持って演説するよりも話をきちんと聞いてもらえますから、効果は高いと思います。

そういう場で話を聞いてもらうことによって、いままで関心がなかった人も応援してくれる可能性もあります。なによりも、政治家の先生本人のテンションが高まっていきます。自分の気持ちが落ち込んでしまっては、選挙はだめですね。

――演説をしていて、聴衆と目が合えば反応が分かりますね。ところで、音楽バンドはいまもなさっていますか。

月に４回やっています。結構、薬政連の仕事にも役立っています。というのも、国会議員の先生も聴きに来てくださるからです。安倍先生は２回くらいお見えになっています。田村憲久厚生労働大臣もいらっしゃいました。

――安倍首相は歌好きですね。

かぐや姫世代です。ちょうどいま、その世代が日本の中心になっています。

卸 連合会と一体となって活動

――そういったネットワークを活用して医薬品卸の社会的地位をもっと高めていく必要があるのではないでしょうか。

医薬品卸の機能はパンデミック時や東日本大震災での対応でかなり評価されていますが、薬政連のいままでの活動によってもたらされた効果もあると思います。それをより発展させていくため、不断の努力が大事です。

例えば、バーコード問題ではメーカーと意見が対立する部分もありましたが、政治家の先生にはかなり動いてもらいました。薬は、他の商品と違って、どこの工場でつくったこのロットだけ回収してくれということがありますから、バーコードがついていなければ厄介なことになります。日本では生物由来製品以外は任意表示になっていますので、早く普及させる必要があります。これについては、さすがに反対する政治家の先生はいません。

――日本では偽薬は大きな問題になっていませんが、世界的には大変な状況になっています。

偽薬は簡単につくれてしまうらしいですね。錠剤を見ても偽薬かどうか分からないし、パッケージの印刷技術がよければ簡単にできます。問題はどうやって流通させるかですが、一番乗せやすいのはネットです。日本の場合は、ネットで医療用医薬品が流通できないのであまり出てこないわけです。

――ネット販売も今後大きな課題となります。

同じ偽物でも、偽札は重罪ですが、偽薬の罪は偽札ほど重くありません。犯罪ビジネスとしてはコストパフォーマンスがいいらしく、だから横行するのでしょう。

ですから、いまは大丈夫だけれども、対応を間違えるととんでもないことになります。仮に偽薬を飲んでしまって中毒や副作用がなかったとしても、病気は治りません。治そうと思って飲んだ薬で治らないとその病気はどんどん進んでしまいます。

――その意味で、卸連合会と薬政連は一体となって活動していく必要があるのではないですか。

まったくそのとおりです。卸連合会は、薬政連が存在することでパワーを持つことができます。他の団体に比べてもかなり有利だと思います。

――製薬企業の政治団体が遅れて発足しましたが…。

もともとは卸と一緒だったのです。だから薬業政治連盟という名前になっているわけですが、途中から分かれました。確か、山之内製薬の森岡さんが日本製薬団体連合会の会長を務めている頃だったと記憶しています。製薬産業の政治連盟と主張が違うというのが理由でしたが、政治連盟に関してはいつも卸が先行していました。

歴史は卸の政治連盟のほうが古く、しかも地元密着ですから選挙に強い。ただし、お金はありません（笑）。

――本日は貴重なお話をありがとうございました。今後も名誉会長として薬政連の活動をよろしくお願いします。